
お化け屋敷の裏側

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お化け屋敷の裏側

【Zマーク】

N7258M

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

科学館で催されている企画展「お化け屋敷で科学する」を訪れた大学生カップル。いつの間にやらお化け屋敷の裏側に入ってしまい、出口を求めてさまよっていると……。（こちりはお氣楽ライトバージョンです）

(前書き)

(* 現在うちの地域の科学館で開催されている「お化け屋敷で科学する」を舞台にしています。去年東京でやっていた物なんでしょうか？バリバリネタバレなので、これから見に行くのを楽しみにしている方は後で読んでください）

その家の前には黄色い薄暗い街路灯の灯る木製の電柱が立ち、今はもう使われていない古い番地のプレートが打ち付けられている。日の高さよりちょっと低い位置に、尋ね人の張り紙がされている。風雨にさらされ、すっかりひび割れて白い毛羽立ちが固まつて、白黒の顔写真はまともに判別できなくなっている。

男性ではあるらしい。

名前はかるうじて「佐藤」とだけ読める。

・・・・・・・・・・

県立自然科学館で「お化け屋敷で科学する」という企画展が開催されている。

大学生の透（とおる）はカノジョの真美と見に来た。昨日土曜が初日で、月曜祝日で3連休の真ん中の日曜はすこく混んでいる。

透は子どもっぽいお化け映画が大好きで、この企画展は去年東京でやっていたものをテレビで見て、面白そうだなあと思っていたものがこの地元の県立科学館にやってきて、大喜びで彼女を伴つてやつてきたのだ。科学館に来るなんて小学生の時以来およそ10年ぶりだ。

30度を超える暑さを涼しいところでやり過ごしそうとお昼を食べてからやつてきたが、地方で本格的なお化け屋敷なんてないこともあるのだろう、企画展の入り口の廊下はずらりと列が伸び、入場まで30分待ちだという。しかし後からも続々人が来るようで、透と真美は仕方なく列に並んだ。

案内の女性スタッフからパンフレットをもらつた。

「マル秘調査資料」と銘打たれた黒と灰色の一いつ折りの物だ。

開くと家の見取り図が現れ、黄色いメモが貼り付けてある。この中古住宅の以前の持ち主に関する報告だ。

- ・家主：佐藤 徹さん
- ・昭和28年7月行方不明
- ・佐藤さんは当時40歳
- ・当時母親は病気がちで、
- ・佐藤さん不明の1年後死亡

透はちょっとギョッとした。

案の定真美が、

「あーらま、あなた行方不明だつてえー」
と面白がつて言った。

透の名字は佐藤だ。名前も字は違うが同じ「あむ」だらう。

透は眉を寄せ、

「うう、やべえ、俺、呼ばれちゃったのかなあ？」
と、怯えた顔で真美をぬうっと下から見て、

「やだ、バカ」

と気持ち悪がらせて、アハハと笑つた。

「いいねえ。雰囲気盛り上がるじやん？」

「透つてこういうところガキだよね？」

「せつかくお化け屋敷に遊びに来たんだ、怖がらなくひや 塙じやん

？」「

「まあね」

と言いながら真美は全然怖そつじやない。クールな女で、つまらないというわけでもないんだろうが、もうちょっと女の子らしくかわいく怖がつてもらつた方が彼氏としては盛り上がる。

列は少しづつ進んでいく。その間退屈させないように壁には白黒の「心霊写真」が張られている。

男性の肩に骸骨の手が透けていたり、木の影が重なつて人の顔ら

しく見えていたり、この科学館なのだろう夜の廊下を人魂のような白い筋が浮遊していたりする。

前的小1くらいの男の子がしきりと父親にあればなんだこうだ一生懸命「種明かし」をしている。透はクスッと笑った。怖いのをおしゃべりで誤魔化しているのだろう。透は自分と真美の間に同じ年頃の子どもを想像してみた。女の子もかわいいだろうけれど、やっぱり男の子の方が父親としては嬉しいかな…なんて。

ようやく入り口前に辿り着いた。この展示は、「科学する」というテーマで、最初にパンフレットの中古住宅の「お化け屋敷」を体験し、抜けると、怪奇現象の科学的種明かしや人が恐怖を感じる精神的な仕組みを解説する展示があり、怖がらされたお化け屋敷を裏側から後のお客が怖がる姿を覗き見る、という構成になっているらしい。

さあてどれほどのお化け屋敷なのか?、子どもっぽい透は大いに楽しみだ。ちゃんとスタッフが中の進行具合を見て、次のお客様をお化け屋敷の「ドア」に誘導している。

前の男の子と父親がドアの前に進み、透と真美は企画展のチケットをもぎりの女性スタッフに渡した。
「三名様でよろしいですか?」

「え?…」

「冗談です。もうしばらくお待ちくださいーー」

黒のドレスに白いエプロンの乗りのいい「スロリメークのお姉ちゃんんだ。

それではどうぞ行つてらっしゃい、と前の親子がドアを開けて入つていった。

ドアの前には木製の電柱が立ち、黄色い薄暗い街路灯がつき、尋ね人の張り紙がある。

真美が張り紙を指さして面白がつた。

「ほら、捜してて?」

透は一ヤツとせいぜい不気味に笑つてやつた。

中からドンッという音と子どもの甲高い悲鳴が聞こえてきた。し

ばらくしてまた何か物音が。しばらくして、

「それでは、どうぞ、行ってらっしゃい」

とスタッフにドアを開けるよう促された。手をノブにかけた透はふと振り返つた。

乗りのいいゴスロリのお姉ちゃんが、

「ドンッ、

と笑い、

「どうぞ、お氣をつけて」

と言つた。

透と真美は、ドアをくぐり、家に入った。

黒のカーテンで仕切られた四角い廊下を進み、突き当たりの黒いカーテンをめくると、ドアの開いたトイレが見えた。先に進むにはその左手のカーテンをくぐらなくてはならない。

歩していくと、トイレは和式で、どうやら昔懐かしい「ボツチャントイレ」…大の用を足すと下から水の跳ね返りのあるくみ取り式トイレ、らしい。

暗い灯りのトイレに更に近づいていくと……

ダンツ、

と突如トイレの中から、ガツ、と指を開いた手が飛び出してきた。

「うわあっ」

と透はのけ反つた。

真美はキヤハハハ、と大笑いした。

「あんたマジ〜?」

「つるつせえな〜、おまえも怖がれよお〜」

と透はすねたふりをしたが、まあ、予想通りだ。しかし、怖がら

なくちゅつまらないじゃないか？

左手のカーテンをぐぐると、
テレビのある居間だ。これまた年代物の画面が球面に盛り上がり
たブラウン管テレビで、サイドボードにはラジオや、写真立てなど
がある。

パツと暗さに慣れた目に虹色の光彩が差し込み、突然ついたテレビの画面に、大口開けた女の顔が大写しになり、

「あはははは、あーはははは、あーーっははははははあ」

と、不気味な顔と不気味な声で大笑いした。

「うわ～、次行こう、次」

真美に急かされ透は次のカーテンをめくった。

台所だ。
炊事台にまな板や包丁が置かれ、そのどれもが黒ずんでいる。
傍らに洗濯機も置かれ、それが突然ガタガタと音を立てて揺れだ
した。

「まあ、怖い。行きましょ」

次のカーテンをめくる。

ここは、細長い廊下のようだ。

真つ暗で何もないようなので進むと、

「あーっはははは、あーはははははは

テレビの女の顔が向こうの空中に浮かび、なんと、半透明の光の
顔が、こちらに向かつてあーーっと宙を飛んできた。

わあつと透は驚いて黒い壁に張り付いた。女の顔はわあつと田の
前を通り過ぎ、後ろの壁に大写しになると、

「あはははは、あーははははははは

と不気味に笑い続けた。

「まあっ、飛んできたわね？ すごいわあ。さ、行こ」

廊下の先へ進んだが、あれつ？、

と、透は迷った。正面のカーテンと、右手のカーテンと、どっちに進めばいいのか分からない。

どっちか迷つた透は、

「こっちでいいのか？」

右手のカーテンに進もうとしたところ、ハツと、手が止まった。その、更に右隣の、カーテンの下がつた黒壁であるべきところが、カーテンの端の隙間から、暗く、人の顔が覗いていた。透は、ギョッとした。

顔は透が驚いたのを見て、すぐに消えた。

「どうしたの？ こっちでいいんでしょ？」

真美に言われ、

「あ、ああ。こっち」と、カーテンをぐぐつた。

透は、

『フフフ』

と心の中で笑つた。さつき覗いた顔、あれは仕掛けではないだろう。きっと裏から様子を見ていたスタッフが、お客である透に見つかって、慌てて顔を引っ込めたのだろう。

なーんだ、途中でもう「裏側」が見えてしまって、透は可笑しくて、怖がるどころではなくなってしまった。次なる部屋は物置だつた。

そこは、一体の裸の女のマネキン人形が立ち、棚に薄汚れたフランス人形や、子どもの人形がごちゃごちゃと置かれていた。「人形つて、あるだけで不気味ね」と真美が言った。

しばらく眺めたが、どうやらここは不気味なだけで特に仕掛けはない、その不気味な静寂を恐れながら、カーテンをくぐつた。

狭い部屋に出て、明るい光の漏れるカーテンを開けると、明るい展示場に出た。

お化け屋敷パートはこれにて終了だ。

「ふうーん、もうおしまい？ まあ、なかなか面白かったじゃない？」

クールに言う真美を横目に見て、透は『フツフーン』と笑つた。

「おまえさあ、本当はけつこうびびってたんじゃない？」

「はあ～～？」

真美は眉根を寄せて透を睨んだ。

「んなわけないでしょ、あの程度で？」

「へえ～～？ そ～お？ それはそれは、お見それいたしました」

透はニヤニヤして、真美は『なによお～』と横を向いてふくれつ面をした。

パネルで怪奇現象の仕組みが解説されていた。透は、

「へえー、あれ、ブロッケンの怪物って言うんだ」

と感心した。空中を笑う女の顔が飛んでくる仕掛けだ。あれはいかにも科学館らしい不思議現象の再現で、面白かつた。どうやら霧と光の関係によって生まれる現象らしい。

パネル展示の他に自分の顔が左右反転しないで見える鏡などがつて、なるほど、見慣れた像と違つて変なものだ。

さて。

この企画展示の目玉、

お化け屋敷の裏側に回つて、後のお客さんを脅かす役の出来るローナーに来た。

係のスタッフに、前の男の子と父親が黒いカーテンの中に招かれ、

何かして、向こうで「キャーー」と悲鳴が上がる。隣のカーテンを開いて出てきた男の子は嬉しそうに思いっきり一〇二〇していた。

「次の方、どうぞ」

招かれて、透と真美はカーテンの中に入った。

狭い小部屋で、前の壁に小さな四角の覗き窓がある。スタッフのお兄ちゃんが説明する。

「お化け屋敷を通つてくるときに台所で洗濯機が動きましたよね？ 実は、この裏がその洗濯機になつていて、この紐で」

と、天井からぶら下がるロープを指し、

「揺すって動かしていたんです。今次のお客さんがカーテンを開けて入つてきますから、この前に来るタイミングを見計らつて、この紐で洗濯機を動かして脅かしてください」

とイタズラの相談をするように説明した。

「よおし、リベンジしてやるうぜ？」

透は真美といつしょにロープを握り、二人で顔を寄せて小窓を覗き、お客様を待つた。

向こうのカーテンを開け、ちょうど自分たちのようなカッフルが入ってきた。奥のキッチンを気味悪そうに眺め、順路に従つてこちらに向かつて歩いてくる。

「今だつ！」

透は小さく叫び、真美といつしょにロープを引いた。ロープは案外重く、力を入れて引っ張ると、

ガタツ、ガタガタガタツ、

と洗濯機が動き、カッフルは

「うわっ」

「きやっ」

ドビクッと身を引いて悲鳴を上げた。

なーるほど、人を脅かすのって、たーのしいなーー。

カッフルが行つてしまい、

「はい、ありがとうございました。大成功です」

スタッフに警められて、透は意氣揚々と出口のカーテンをめくつた。

真っ暗だった。

『あれ?』

透はグルッと見回した。狭い、細長い所に出てしまった。間違えて変な横つちよに抜け出でてしまったようだ。

「え? なにここ? 違うじゃない?」

後ろにくつついてきた真美も戸惑つた声を出した。

「なんか間違えたみたいだな?」

透は真美の背後のカーテンを探つて元の小部屋に戻りうとしたが、探つても、カーテンの裏は硬い板が続いていて、出てきた場所が分からぬ。そんなに何歩も動いていいし、後ろには真美もいるのだから、出口はすぐその近くにあるはずなのだが、どうしても分からぬ。小さな声で

「おーい、スタッフさん!」

と呼びかけてみたが返事はない。いつの間にか向きが変わってしまつたかと反対側に手を伸ばして探つてみたが、やはり硬い板が続くばかり。

おつかしいなあーー……と首をひねり、セーディングしたものかと思案していると、壁の向こうで

「きやあっ!」

と悲鳴が上がり、ギョッとしたが、

「きやあっ!」

とこちらでも真美が悲鳴を上げて腕にしがみついてきた。

「おじおじ、大丈夫だよ。ここはお化け屋敷なんだからさ!」

そう、壁の向こうはお化け屋敷で、新しいお客様さんが何か仕掛けに脅かされたのだろう。だが真美は暗いところに閉じ込められて、面白がつていられる状況ではないようだ。

「だつてえー……

と腕にすがりつく真美は、やつぱり内心ではけつこう怖がって、強がつていただけなのだろう。

「大丈夫だよ」

透は真美のじがみつくり手をポンポン叩いて安心させようついでに言つた。

「どうやら本当のお化け屋敷の裏側に出かけやつたみたいだけど、どうせたいして広いお化け屋敷じゃないんだからさ、出口は他にもあるよ。むしろわ、ラッシュ嘉年华？ 取りあえず、先へ探検してみよめざせ？」

「うん……」

真美は大人しく言つて、腕から離れ、代わりに透のTシャツの裾を握つた。

「よし。じゃ、行こうぜ？」

透は優しく言いながら、内心では『けつこうかわいいじゃん』と真美の意外に女の子らしい一面に喜んでいた。

取りあえず、じつち、と見当を付けて細長い先へ進んだ。

進んでいくと、上方のカーテンの継ぎ目からライトの光が漏れ見え、「あはははは、あ一つははははははは」とけたたましい女の笑い声が響いてきた。壁を作っている板が天井までなく、上の開いた部分でわずかにカーテンどうしの重なりに隙間があるのだろう。向こうから「わあっ」と驚く声がして、女の笑い声とこの光の感じから『ああ、顔が飛んでくる奴だ』と分かった。

確かにこの先が物置で、そこを抜ければもう出口だったなと思い出しながら、このまま先へいつしょに進めるのかな？と先へ進んだ。すると、ふと、男の横顔が現れて、こぢらに気付いてギョッとした顔をした。

男の顔はすぐに消えた。

はて？、と透は考えた。もう笑い女の映写も終わつて真つ暗になつてしまつて何も見えないが、どうやらここは板と板が重なつて細い隙間を作つて、まつすぐ角度の合つたほんの短い距離でだけ向こ

うの景色が覗けるようだ。

透はお化け屋敷を回るとき自分がここで見た不気味な顔を思い出し、なんだ、あの顔も自分と同じよう裏側に迷い込んだお客様だったのか、と苦笑いした。

多少不安に感じていた透も迷ったのが自分たちだけじゃないと分かつてほつとした。

「だいじょぶだいじょぶ、行くよ」

後ろでぎゅっとTシャツの裾を握りしめる真美に声を掛け、透は先へ進んだ。

右手へ曲がり、少し進み、また右手へ曲がると、少し広いところへ出た。

向こうからはなんの音も声も聞こえない。人形たちのいる物置だらうか？

先へ進んで出られるのかな？と伺った透は、床に目をやりギョッとした。

裸の人形が転がっていた。

ドレスとかつらをばがされたフランス人形らしい。暗い中でもなんとなくひどく汚れているように見える。

なんだろう？ 壊れて、展示から外したのか？ いや、表の物置にも壊れた人形は展示されていたと思う。人を怖がらせるための人形なんだから、壊れて、汚れていた方がいいだろう？

透は、片足をカーテンの裾に隠し、うち捨てられたように手足を不自然に投げ出し、首を「クリツ」とこちらに向け、暗く青い瞳を光らせている人形にゾッとしたものを感じた。

「行こうか」

透が先へ進もうとするとき、真美の手がTシャツから離れ、

「真美？」

真美は先へ歩いていくと、しゃがみ、床の裸の人形を拾い上げ、大事そうに胸にぎゅうっと抱きかかえた。

「真美？ なにしてんの？」

透は真美の背中に声を掛け、肩を押された。

「ほら、行くよ？」

しかし真美は透の手を払いのけるように首を振ると、人形を抱え込んでますます背中を丸めた。透は、不安になつた。

「どうしたの？ 人形、置きなよ？ ほら、行こう？」

真美は、人形を抱えたまま動こうとしなかつた。

透は困った。

「それはこここの備品のはずだからさ、真美の物じゃないんだよ？ さあ、元に返そう？」

しゃべりながら透は自分は何を言つているんだろう？と思つた。まるでオモチャ屋で気に入つたオモチャを抱えて放さない幼い子どもに言い聞かせているみたいだ。

「なあ、真美……」

透は、なんとなく、彼女の丸まつた背中が怖くなつた。

ふうっと、

白い光が瞬きながら宙を走り、
なんだ？と顔を上げかけて、ハツと、彼女に目を戻した。
ゾツとした。

こちらを見上げて、睨んでいる。

白い不安定な光に瞬く彼女の顔は……、
真美には、見えなかつた。

「だ……、誰？……」

じいっと睨んでいる怖い目。

切れかかつた蛍光灯のように暗く白く彼女の顔を照らす光。
透はそうと視線を上げた。

ふわふわと、宙を白い人魂が漂つていた。

透はどういう仕掛けになつていいのだろうと思つたが、
彼女が立ち上ると、胸に壊れた裸のフランス人形を抱き、頭上
に白い人魂を漂わせながら、

透を見下ろして、

「あははははは、あーつまははははははははは」

と大口を開けて笑い出した。

透は、ぺたんと尻をついた。

「あははははは、あははあははははは」

狂ったように笑い続ける女は、抱いていた人形を両手に持つて透に突き出した。

抱いてあげて、

と言つよつて。

「あははははは、あはあはあはははははは
透は、

「ひい——つ」

悲鳴を上げて這いながら女の隣をすり抜けて、立ち上ると、

「うわああああ！」

大声を上げて、目の前の黒いカーテンに飛び込んだ。セットを壊して怒られようが弁償させられようがどうでもいい、どうでもいいから、誰か、

「た、助けてくれえ——つ……！」

両腕で顔をかばいながら飛び込むと、バサッとカーテンが腕にまとわりついて、分かれ、透は次の空間に飛び出した。

「きやつ」

「うわあ

「わああつ！」

三つの悲鳴が重なった。カーテンから飛び出した透はお化け屋敷を回っているお客様のカップルに鉢合わせしたのだ。

「え？ なんなの？ これも演出？」

驚き困惑する女性。

「あ、いや、その……」

透が説明に窮すると、後ろで明るい光が射した。

「どうしました？」ここでお化け屋敷はおしまいですよ？」

カーテンを開いて科学館の制服を着たスタッフが覗いていた。

「た……助かったあ～～……」

透はとにかく明るい光の下へ飛び出ると、はあ～～…と息をついて座り込んでしまった。

「ああ！ ちょっと透ー、あんたどこに消えてたのよ？」

真美がブンブン怒つてやつてきた。「口スロリメイドの切符切りもいつしょだ。彼女は

「突然消えたというので捜していたんですよ？」

と首を傾げて透の顔を覗き込んだ。

「消えた？…」

「そうよおー！」

真美がブンブン怒つて言つた。

「仕掛けの部屋から出たら、あんたいないんだもん！ 先に出ちゃつたってほど離れてなかつたし、スタッフさんに訊いても一人で出てきた若い男性はいなって言つし、いつたいどこに行つちゃつたんだろうつてみんなで捜したんだよ？」

「みんなで？」

透はほつとして一〇一〇見下ろしているスタッフやニヤニヤ笑つているお密たちを見回した。

「そ、それが……」

透は格好悪く立ち上がり、中での出来事を話した。

「ゴスロリメイドは首を傾げた。

「ここにそんな通路ないんですけど？」

と、証拠を示すように透を連れてあの洗濯機の裏側の小部屋に入り、ペンライトで照らしながら、

「ほら、どこにも裏側に行けるような穴なんかないでしょ？」

とカーテンをめくつて木の板を見せた。たしかに、こちら側から入つて、出るだけで、正面にも左右にもその向こうへ抜け出られる

よつな穴や隙間はなによつだ。

おつかしいなあー……、と透は狐につままれたよつな気分になつた。

「ゴスロリメイドは明るい照明の下に出るとかわいい顔で笑つてこともなげに言つた。

「お化け屋敷には本物のお化けが寄つて来るつて言いますからね。でも、

大丈夫だったでしょ?~

お化け屋敷のお化けは、お密さんに直接触れないのがルールです

から

透は、一番最初に抱きつかれたがなあー、と思つたけれど、彼女の手前それは内緒にしておこうと思つた。

おわり。

(後書き)

(* 一部意図的に仕様を変えております。残念ながらスタッフさんにゴスロリメイドさんはいません)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7258m/>

お化け屋敷の裏側

2010年10月8日13時06分発行